せんだい
sendai-city chronicles communication paper.
市史通信
第2号
仙台市博物館市史編さん室

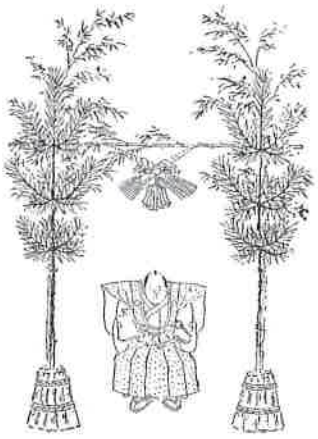
せんだい今昔

仙台の門松

現在、一般的に見られる、斜めに切った竹と松を組み合わせた門松は明治以降に広まったもので、仙台の伝統的な門松はこれとは違っていました。今でも郊外では昔ながらの門松を立てる旧家もあるようですが、市街地では伝統的な門松はまったく見られなくなりました。それでは、仙台の市街地で飾られていた門松はどんなものだったのでしょうか。

江戸時代の文献によると、仙台の伝統的な門松は右の図のようなものでした。人の背たけの倍もあるような大きな松を用い、その根元は「鬼打木」と呼ばれる割り板で囲われていました。これに笹竹を添えたものを2本立てて、その間に昆布などの海藻類、蜜柑、柚子、炭、柿などを飾ったしめ飾りを渡していました。笹竹はしめ飾りと一緒に松と松の間に渡されることもありました。このような豪勢な飾りでしたので、それにかかる費用もかなりかさんだようです。幕末にはこれをぜいたくであるとして、門松をやめて「枝松」を飾るようにとのお触れが出たこともありました。

ところで、仙台城内に飾られた門松は、今の泉区根白石から献上された材料で作られていました。何時ごろから始まったことかはっきりとはしませんが、寛文10年（1670）の古文書では、定められた8軒の家が献上することが恒例であると記されていますので、おそらくは江戸時代初期からの伝統だったのでしょう。この古文書の記述では、献上された門松は50組近くにも及んでおり、城内のあちこちに門松が飾られた様子が目に浮かんできます。



郷土史家の故三原良吉氏によると、門松の他にも、太い青竹を横につり、塩鮭１本・雉子１羽・するめ１束・昆布１束をぶらさげた豪快な正月飾りが二の丸表対面所に飾られていたそうです。今、仙台城の復元事業が話題になっていますが、こうした風習の復元も見てみたいものです。

新刊登場！ 仙台市史

昨年、仙台市史に『通史編1 原始』と『資料編5 近代現代1 交通建設』の2冊が新たに加わりました。とくに『原始』は、特別編・資料編に続く新しいシリーズ、通史編のスタートを飾る一冊です。

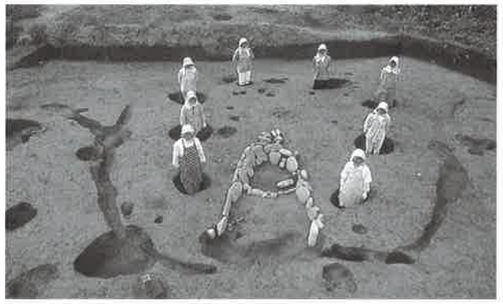
ところで、「市史」という名前を聞いて「硬そう」とか「文章ばかりで難しそう」と、本屋で見つけてもつい敬遠してしまうことはないでしょうか。でも、こわがらずにページを開いてみれば、意外な発見もあるのです。

むかし、むかし、大昔

MUKASHI MUKASHI, OOMUKASHI

通史編 原始

下の写真を見てください。女の人たちは何をしているのでしょう。そして、まんなかにある、石製の“A”にはどんな意味があるのでしょうか。



ひどく恥ずかしい思いをしたときによく「穴があったら入りたい」と言います。しかし、この人たちは恥ずかしくて穴に入ったのではありません。この写真は太白区の川添東遺跡で見つかった縄文時代の竪穴住居の跡で、穴は家を支える柱が立てられた跡です。女の人たちは、住居をイメージできるように立つ遺跡の発掘作業員です。柱の本数と配置は時代によってさまざまです。家の形も屋根を地面にそのまま置いたような竪穴式が一般的でしたが、なかにはかつて農村で見られたかやぶき屋根の家とさほど変わらない、壁立式の家もありました。

まんなかの石組みもアルファベットではなく、これは暖房や調理に用いた炉の跡です。一口に炉といっても、住居の床をそのまま利用したもの、石をめぐらせたもの、床に穴を掘って側面を石で補強したり、土器を床に埋め込んだものなどいろいろなタイプがありました。写真の炉は、穴を掘って石で補強した炉にほかの炉を組み合わせた複式炉と呼ばれる大型のものです。こうした大きな炉は縄文時代中期に数多く造られました。川添東遺跡のほか、観音堂遺跡（青葉区）、北前遺跡（太白区）、山田上ノ台遺跡（太白区）などで発見されています。

縄文時代のころから炉のまわりは一家団らんの場でした。家族そろって炉を囲み、食事や仕事をしました。また、親から子へ、古くからの行事や物語を伝える重要な場だったとも考えられています。ただ、炊事は炉のつくりからみて、屋外に設けた炉で行ったとみられます。

『通史編1 原始』では、大昔の人びとの暮らしぶりや、仙台近郊の遺跡での最新の研究成果を、オールカラーで写真・図版をふんだんに使って紹介しています。

写真提供 仙台市教育委員会

市史セミナー開催！

「仙台市史セミナー」は、年に一度、仙台市史の執筆陣が市史の内容について講演などを行うイベントです。昨年12月11日（土）に9回目のセミナーが仙台市博物館ホールで開催され、約100名が参加しました。「発見!?原始人生活術ーむかしびとのくらし方おしえますー」をテーマに、『通史編1 原始』の執筆者である須藤隆（東北大学教授）、小井川和夫（東北歴史博物館企画部長）、太田昭夫（川崎町立川内小学校教頭）の三氏が、それぞれ旧石器、縄文、弥生時代の人びとのくらしについて、スライド資料を使いながら講演しました。講演の概要は、今年刊行の「市史せんだい Vol.10」に掲載されます。

伸びゆくみち、広がるまち

NOBIYUKU MICHI, HIROGARU MACHI

資料編 近代現代1 交通建設

宮城県が「自動車取締規則」を制定したのは、明治36年（1903）12月28日のことです。40条からなる規則の中には、今の自動車事情と比べると、びっくりするようなものもあります。

まずは定義。「瓦斯・電気、若クハ蒸気等ヲ原動力ト為シ、乗合又ハ貨物運送用ニ供スル」ものが自動車とされました。ここでの瓦斯とはガソリンのことです。自動車の大きさは、幅が6尺（約1.8m）まで、長さは10尺（約3m）まで。座席の幅は、ひとり分1尺4寸（約42cm）以下は禁止です。幅3間（約5.5m）以下の道路での自動車の通行は許されませんでした。

事故防止への配慮は欠かせません。市街で時速7マイル（約11km）以内、そのほかでは10マイル（約16km）以内と速度規制がありました。併走や競争は禁止、車間距離は50間（約91m）必要でした。ちなみに、自転車の車間距離は3.6m以上で、12歳未満の子どもは路上で自転車に乗ることすら禁止されていました。

自動車の進路に背を向けた歩行者があれば、20間（約36m）後方で警鈴を鳴らしました。もし相手が気づかなかったら、即座に停車です。往来や下り坂では、絶えず警鈴を鳴らして徐行とされました。今だと、クラクションを鳴らされつづけたら迷惑この上ない話ですが、鈴というところにのどかさが感じられます。

これらの規則は自動車の発達した今では考えられませんが、車より歩行者の安全を優先するとむしろこれくらいが当然かもしれません。

しかし、自動車が普及するにつれ、県内限定の規則ではカバーできなくなり、大正9年（1920）、「道路取締令」で交通ルールの全国統一が行われました。

『資料編5 近代現代1』では、近代から現代にかけての交通の発達と、まちの発展を読み取ることができます。

自動車以前の重要な足＜人力車＞
仙台市歴史民俗資料館蔵

『市史せんだい』のお知らせ

『仙台市史』の機関誌『市史せんだい』は、現在Vol.9まで刊行されています。

自然や交通といった身近な話題を取り上げた特集記事をはじめ、市史セミナーの講演要旨や史料紹介など内容充実、みどころ満載です。

『市史せんだい』のお求めは、仙台市博物館2階売店でどうぞ。

価格は1冊900円（税込）です。

※Vol.1とVol.2、Vol.4は品切れとなっております。

Vol.9の特集は≪まちを守る≫。火事と戦い、水害に耐え…まちを守る人々がいます。

施設探訪 東北地方建設局道路資料館

仙台市史で使いたい写真や資料が博物館にないとき、必要なものはよそからお借りします。また、資料が見つかれば調査にでかけたりもします。このコーナーでは、市史編さん事業の過程で訪れた施設をご紹介します。

道路資料館は、一般の人びとの道路に対する関心や理解を深める目的で、昭和63年5月30日に開館されました。道路に関する資料館は全国で唯一です。

開館10周年を記念して新設された映像ルームでは、大型スクリーンで道路に関するさまざまな記録や、松尾芭蕉がたどった歴史街道をテーマにした映像など、ビデオ約150本を無料で鑑賞できます。

図書室では、道路関係の専門図書や雑誌など、1万冊もの貴重な蔵書があり、『資料編5 近代現代1 交通建設』でも参考にさせていただきました。

また、仙台西道路集中管理室では、ここでしか目にすることのできない交通状況の監視の様子が見学できます。

2階では「東北の道路写真コンテスト」の入賞作品約200点が展示されています。ほかにも多くの展示物があり、ふだん何気なく利用している道路の新しい一面を発見することができるでしょう。

道路資料館は、仙台宮城インターチェンジより車で2分のところにあります。

東北地方建設局道路資料館
仙台市青葉区折立1−1−1
TEL 022−226−1620
開館時間/9:30〜17:00 休館/月曜日・年末年始

読者のひろば

「仙台市史」や「市史通信」へのご意見、ご感想をお寄せください。あて先は、
〒980-0862
仙台市青葉区川内三の丸跡
仙台市博物館市史編さん室
市史通信係まで
皆さまからの貴重な声、お待ちしております。

◆「通史編1 原始」「資料編5 近代現代1 交通建設」の刊行、誠におめでとうございました。関係者皆さまのご苦労、御努力に対し敬意を表します。博物館も開府400年の行事でご多忙とは存じますが、市民のためよろしくお願いします。

◆編さん室の皆さま本当に、市史編さんのお仕事ご苦労さまです。今後も、万年に残る貴重な資料収集や編さん、根気づよくがんばってください。一層のご活躍を祈念します。

※今回は市史に資料を提供してくださった方のおたよりから抜粋しました。

MONOGATARI SENDAI

武芸伝書

モノがたり 仙台

「天狗が踊っている!?」そんな印象を右下の図から受けませんか。これは夢想願流（むそうがんりゅう）剣術伝書に描かれた武芸の形の説明図です。武芸伝書はたいていきれいな巻物になっており、そのためか、藩士の家の文書群には伝書が含まれていることが多いようです。

近世に入ると、本来は体得すべき武芸が、成文化されるようになりました。その背景には、大坂夏の陣のあとのいくさのない平和な時代の訪れがあるといいます。武芸を生かす実戦の場がなくなったのです。伝書を持つことは武士のたしなみとなっていきました。お金を払えば未熟な腕でも免許がもらえる、という例もありました。

そんな時代にあって、この「夢想願流」の伝書は、創始者の蝙也斎（へんやさい）こと松林左馬助を祖とする茂庭松林家に伝わる、いわば筋金入りの「ホンモノ」です。慶長18年（1613）9月の日付入り。門外不出ということなのですが、ご当主のご好意によりお借りしました。

蝙也斎はもともと幕臣伊奈半十郎の兵法の師でしたが、寛永20年（1643）に二代藩主伊達忠宗のスカウトで仙台藩士になりました。剣豪蝙也斎は天下に名高く、慶安2年（1649）には病の徳川家光を慰めるため武芸を披露したこともあるほどです。

しかし、松林家文書のなかで、仙台藩の状況を知るうえでの有益な史料は、二代目以降のものと思われます。養子に迎えた二代仲左衛門以降の松林家は、むしろ有能な役人として活躍しました。江戸上屋敷の絵図や山境争論始終記、屋敷名・各人頭署名・印の入った茂庭村絵図など、貴重なものが残されています。

精神修養と鍛錬で、その名の通り蝙蝠（こうもり）の敏捷さを身につけた剣豪と、有能な役人。両者が一つの家系の構成員であったことを思うと、この伝書が今の私たちに伝えてくれるのは、武芸ではなく平和な時代での藩士の生き方のようです。

「夢想願流
小具足之次第」
（部分）

既刊 Pick up

2000年問題であわただしかった年末年始。騒ぎで正月休みを満喫できなかった人、逆にいまだに正月気分が抜けきらない人は少なくないと思います。

でも、安心してください。お正月はまだ終わっていません……とは大げさですが、民俗学では1月1日を中心とした正月行事を大正月、15日前後の行事を小正月と呼び区別しています。農家では15日前後に、豊作祈願や作柄占いなど、農耕にかかわる行事をします。小正月こそ本来の正月の姿だという意見もあります。

さて、民俗とは何でしょう。あえていえば、「生活の型」とでもなるでしょうか。幾世代にもわたり蓄えられた生活経験から、自然にできたスタイル。周囲との調和を守った、無理のない生活のルール。先祖から脈々と受け継がれてきたくらしこそ民俗なのです。

年中無休のコンビニでは、いつでも手軽に買い物ができます。野菜やくだものは一年中出まわり、「旬」という言葉は聞かなくなりました。それもひとつの生活の姿ですが、便利さの代償に失ったものはないでしょうか。あるいはどこかで無理をしていないでしょうか。仙台方言、民謡、昔話を収録したCDがついた『仙台市史 特別編 民俗』から、先人たちのくらしを通して、私たちのくらしを振り返ってみませんか。

小正月の団子木（青葉区大倉）

好評発売中

仙台の歴史を完全収録 各分野ごと続々登場

全体の計画（30冊）

- 通史編（9冊）　原始・古代中世・近世1～3・近代1～2・現代1～2
- 資料編（12冊）　古代中世・近世1～3・近代現代1～4・伊達政宗文書1～3・慶長遣欧使節
- 特別編（9冊）　自然・考古資料・美術工芸・市民生活・板碑・民俗・城館・文化芸能史・地域史

【通史編1】原始
【資料編5】近代現代1 交通建設
【資料編1】古代中世
【資料編2】近世1 藩政
【資料編3】近世2 城下町
【資料編10】伊達政宗文書1
【特別編1】自然
【特別編2】考古資料
【特別編3】美術工芸
【特別編4】市民生活
【特別編5】板碑
【特別編6】民俗

「通史編」3,000円（税込み価格）
「資料編」4,000円（税込み価格）
「特別編」は板碑のみ 5,000円（税込み価格）
ほか各 6,000円（税込み価格）

●発売元　宮城県教科書供給所
〒980-0021　仙台市青葉区中央二丁目9-22　TEL022-222-5052　FAX022-222-5056
県内主要書店で発売します。本の発送をご希望の方は、上記あてにお申し込みください。
なお、郵送の場合のお支払いは、配本に同封する振込用紙にてご入金ください。

●詳しくは、仙台市博物館市史編さん室までお問い合わせください。
仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862　仙台市青葉区川内三の丸跡　TEL022-225-0814　FAX022-216-1830

編さん室より

あとがき

20世紀締めくくりの年がスタートしました。「市史通信」第2号をお届けします。「仙台市史」のことをより多くの皆さんに知っていただくために、硬すぎず、柔らかすぎず、弾力性をもった紙面にしたいと思っています。今後もどうぞごひいきに。

せんだい
市史通信
第2号
発行年月日●平成12年1月19日
編集・発行●仙台市博物館 市史編さん室
〒980-0862
仙台市青葉区川内三の丸跡
TEL 022-225-0814
FAX 022-216-1830